

# 米国から「モビリティのすゝめ」

武内 宏樹

米国の大学は卒業式シーズンたけなわである。この時期になると、各地の卒業式でのスピーチが話題となる。筆者が教鞭を取るサザンメソジスト大学(SMU)でも5月18日に卒業式が行われ、アメリカン航空会長兼最高経営責任者(CEO)のダグラス・パーカー氏が「若者よ、旅に出よ」というスピーチを行った。旅に出て、大学で身につけたコミュニケーション能力を駆使して、「多様性」(diversity)を受け入れる人間性を磨くことが、グローバル化と社会の「分断」(divided)が進む現在の世界では大事なのだというのがパーカー氏の言わんとするところであった。「立場上“united”がいいとは言えないからあえて“divided”はよくないと言いが、だからアメリカン航空に乗って旅に出なさい」と締めくくった。

2017年8月17日付のニューヨーク・タイム

ズ紙に“A 2:15 Alarm, 2 Trains and a Bus Get Her to Work by 7 A.M.”と題する興味深い記事が掲載された。カリフォルニア州ストックトンに住むシーラ・ジェームズさん(62歳)は、80マイル(約130キロ)離れたサンフランシスコにある職場まで、電車とバスと地下鉄を乗り継いで3時間かけて通勤しているという。ジェームズさんは年収8万ドルでミドルクラスに属するが、住宅価格の中央値(median)が120万ドルに達しているサンフランシスコの職場近くに住むのはあきらめて、住宅価格の中央値が約30万ドルのストックトンから超長距離通勤をしているという話である。決してジェームズさんが例外というわけではなく、ストックトンのあるサン・ホアキン郡からは毎日約5万人がサンフランシスコに通勤している。そのうち9割がマイカー通勤であるが、朝夕は高速

道路が渋滞するので車でも3時間ほどかかってしまう。米国の大都市では住宅価格が急騰していて、サンフランシスコでは中央値が120万ドルというのも衝撃的であるが、それ以上に筆者が驚いたのは、130キロ移動するのに3時間もかかるという事実である。130キロと言えば、日本では宇都宮から東京の距離である。新幹線に乗れば50分、在来線を利用して90分まで到着する。

米国では通勤に90分以上かかる人は「スーパードミューター」とよばれる。都市計画の専門家によると、「90分以内」というのが「都市圏」としての一体性を形成する一つの目安だそうである。筆者が住むダラス・フォートワース(DFW)都市圏は、面積が1万平方マイル(2万5000平方キロメートル)に迫る全米最大の都市圏であるが、高速道路網が充実しているので、端から端まで90分で移動できる。さらに現在テキサスでは、ダラスとヒューストンを結ぶ新幹線の建設計画を、J R東海が技術支援をしているTexas Central Partnersという会社が100%民間出資で進めている。実現すれば、全米で最も活気のある二つの都市圏が90分で結ばれることになり、人口1500万人の「メガ都市圏」が誕生することになる。

グローバル化の時代において地理的モビリティと社会的モビリティは直結する。仕事を見つけたら仕事のあるところに移動することが不可欠で

あり、移動を厭わない人ほど社会的に成功する確率が高い。ところが、米国人の地理的モビリティは近年大きく下がっている。通勤圏内に手頃な価格の住宅が見つけれなければ、人は自分に適した仕事があるからといってそこへ移動することはすまい。交通インフラの整備が後手に回っているサンフランシスコのような都市では、好調な経済が住宅価格の急騰をもたらし、その結果経済格差が拡大して、短絡的に物事を考えるポピュリズムの台頭へとつながる。

自国第一主義を掲げるトランプ政権が誕生したのは、今年の卒業生が在学中のことであった。技術革新についていけなくて職を失ったのを移民と貿易のせいにする、多様性を受け入れられない人々がトランプ氏を大統領に押し上げたのである。馴染みのない土地に移動して新たな生活を始めるときには、相応の覚悟と思いきりが必要であり、未知への探究心と易きに付かない勇気がその原動力となる。World Changers Shaped Here」というモットーを掲げるSMUの卒業生は、自分の考えを経験的事実と照らし合わせて論理的に説明するというコミュニケーション能力を学んだはずであるから、多様性を受け入れる人として、モビリティの高い「人財」として活躍してくれることを確信している。

サザンメソジスト大学(SMU) 准教授